
アンコンディショナル

アジト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンコンデイシヨナル

【Nコード】

N8339F

【作者名】

アジト

【あらすじ】

大学に通うために一人暮らしを始める川元喬生。彼には同じマンシヨンから同じ大学に通う、中学からの幼なじみ真木玲花がいる。性別を気にすること無く親友のように振舞う二人だが、その本心は…。

第一話

「こんなもんか、ふう。ちよいと休憩」

俺はクローゼットの前に最後のダンボールを置いて一息をつく。

ワンルームでも比較的余裕のある間取りのはずが、シェルフや机の前に乱雑に積まれたダンボールのせいでひどく狭く感じる。

それでも片付けの面倒くさを大きく上回る高揚感が俺の心を占めていた。

何故なら、今日から一人暮らし。

実家からは一時間半以上かかる都内の大学に通うため、ドアドアで20分程のマンションに引っ越してきた。

これからの生活を考えればテンション上がるなと言う方が無理！

運ぶものは運び終わり業者さんに引き取ってもらい、軽い休憩を挟んでから作業を再開する。

押入れや机の周辺に積んだダンボールは一先ず放置して、まずはキッチンに手をつける。

「一人暮らしと言ったら自炊だよな」。米は時間がかかるから先に炊かないとな」

コメを先に準備しておき、ガラガラのキッチンに皿や鍋を配置しながら料理を始める。材料は家を出る時にムリヤリ持たされた野菜どもでなんとかすることにする。

「うし、やるぞ」

殆ど料理なんてしたこと無いけど、何とかなるだろ。お菓子作るよりは簡単だって誰かが言ってたもんな。

「まあ初日だし…こんなもんか」

料理を開始して約一時間半。目の前にはフライパンの上には苦しよっぱいクロ焦げのものと、小さな鍋には具の野菜がカツチカチのままの訳が分からない汁物が完成していた。

ここまでアレな料理になるとは、笑うしかない。あっははは。

「はあ…」

引越し初日だし、惣菜でいいよな、うん。
…スーパーどの辺だったかな。

上着だけ着替えてマンションのドアを開けると、タイミングを見計らったかのように携帯のバイブが鳴る。

携帯を開くと、ディスプレイには『玲花』と着信表示されている。

「もしもし、どした？」

『もしもし。今大丈夫？』

「おお」

『今日はご飯どうするの？』

「ああ…メシね。作ったよ、うん」

『おっ、自炊するんだ。えらい。ちょっと相談なんだけどさ』

「ん？今ちよつど部屋出たところだぞ」

『ホント？待って、今開ける』

携帯を切って少し待つと、自分の部屋の二つ先にあるドアが開く。

「ちよつど良かった！入って入って」

ドアから顔をのぞかせたのは、さっきの電話の相手。真木玲花。

玲花が中学生の時にウチの近所に越してきてから、同い年の子供がいる共通点からか親同士が意気投合し家族ぐるみでの付き合いがある。俺と玲花は中学も高校も同じところに通い、大学まで同じところに決まった。そして今度は同じマンションに。

何と言うか…マンガみたいな幼馴染。

さすがに同じマンションというのは抵抗があったが、玲花のおばさんから頼まれた（女の一人暮らしが心配だったんだと思う）ので同じマンションに決めた。

玲花はというと意外にも素直にその条件を受け入れた。一人暮らしを許可してもらえた喜びが上回ったんだと思う。

ドアから顔をのぞかせたのは、さっきの電話の相手。真木玲花。

中高とスポーツをしていたからかスタイルは正直良い。背も170ある俺と同じくらいだから、かなり恵まれてる（女は身長が高くてもうれしくないかもしれないけど）。まあ本人は筋肉質で嫌みみたいなことをよく言ってる。

特徴はその身長と本人も気にするクセっ毛。ただこっちに来る前に

美容室で軽くパーマをあててきたらしく、今はそのゆるく巻かれた
ミディアムショートがお気に入りらしい。

昔は色々あったが、今では男女ということも気にならないくらい一
緒にいる親友だ。

「ダメだな、ウンともスンとも言わないな。壊れてるっばい」

「やっぱり。もう…セツトしたときはスイッチ入ったのに！初日から
らついてないな」

壊れた炊飯ジャーを恨めしそうに見て、深い溜め息。それでも諦め
がつかないのか、電源コードを抜き差ししたり、ボタンをポチポチ
と押している。

諦める。

ふと部屋の中を見回すと、やはり自分と同じ様に大小のダンボール
が置かれ、最小限の生活スペースができているだけ。同じ日に引っ
越してきたんだから当たり前か。

多分自分と同じように一人暮らしといたら自炊！派なんだろう。
キッチンまわりだけは食器やらが既に置いてあり、既に妙な生活感
すら漂う。

炊飯器を床におろし、別の場所から電源をとろうとしている玲花。
いや…いい加減諦めろよ。

そうだ、ご飯くらいなら俺が分けてやればいいのか。

「なあ、ご飯なら俺炊いたやつ分けてやるよ」

「ホント？助かる」

「後で持っていくよ。一時間くらい後でいいか？」
「おかずを買いに行く時間を考えてそう提案する。」

「うん、ありがとう。そういえば、これから買い物？」

「惣菜を買いに。こっちは見事におかずで失敗したよ。」
「そして既にゴミ箱行きだな。」
「そんなに俺の失敗が楽しいのか、爆笑する玲花。」

「あはは、喬生らしい。じゃあ一緒に食べない？ご飯もらっかわりにおかずあげるよ。」

「その手があったか！食べる食べる、早速ご飯持ってくる」

第二話

「さーで、いっただきます」

空腹だから何でもいいや、という気持ちで玲花の料理を食べて、正直驚いた。

おいしい。

高校の時…と言っても二年くらい前だけど、その時食べた料理はマズかった。はつきり覚えてる、体育祭の時に作ってきてくれた弁当…確かにメシマズ弁当だったはずだ。

「うめえ。何、練習してきた？」

「高校の時だって、あれから自分のお弁当はよく自分で作ってたもん。」

あれから…ねえ。

「…そつか。とにかく料理上手いのは意外だ」

「そんな不思議そうな顔してると、おかず取り上げるよ！」

「え！？うそうそ」

「でも意外なのはこっち。喬生のことだから、今日は絶対コンビニ弁当だと思った」

「一人暮らしっぱいことしたくなっただよ。今日の感じからすると…そのうちビニ弁になるかもしれん」

「あはは。でも食生活はちゃんとしないと」

「まあね」

くそう、メシが作れたくらいでお姉さん気取りか！

その後の食事中は今までと変わらない、下らない話で盛り上がった。ただ今日からはお互い一人暮らしで、いつもいる場所じゃないということ。二人つきりで一緒にメシを食うのも久しぶりだったので、何だか不思議な気持ちだった。

何気なく玲花の部屋を見渡して、あるものが目に入る。

「そつえば、炊飯器どうすんだ？」

夕飯を終え、二人で洗い物を済ませているとき、ふと炊飯器が目についたので玲花に訊ねる。

結局炊けなかったコメは「もったいない」と俺の炊飯器に移し（俺の炊飯器のご飯はパックに分けて冷凍庫行き）、役目を終えた玲花の炊飯器はクチを開けたまま床に放置されている。

「ん、ないと不便だからね。今週末にでも池袋あたりに買いに行くよ」

「うわ、もう都会人ぶってるよ。池袋だって」

「何よ、高校生の頃にも何回か行ってるんだから」

「ほー」

そんなムキになるあたり、大して俺と変わりないんじゃないか。と言っても俺は行ったことないけどね。人ごみは苦手だし。

「全く。安いのがあればいいんだけど、痛い出費だわ。あ…という訳で新しい炊飯器買うまでご飯お願い」

「はあ？サトウのゴハンで我慢しろよ。あれ美味しいって姉貴が言ってたぞ」

「嫌よ、お金かかるもん。もちろん私はおかず作るからさ」

「ほっ」

べ、別におかずが欲しいわけじゃないんだからねっ！ご飯がないと困るって言うから…。勘違いしないでよ！

なんてね。

「お疲れさん。川本君、休憩とっちゃって」

「はい。」

店の外にあるイスに腰を落ち着け、一つ溜め息をつく。

高校では郵便局での短期バイトしかしたことがなかったのも一人暮らしを満喫するためのステップ、と引越してきてすぐにバイトを探した。

そして求人情報誌でタイミング良く募集をしていた駅前のカレーシヨップで雇ってもらうことになり、今はそのバイト初日の休憩時間。と言っても、裏口にあるイスで一息つく程度。隣は雨ざらしの即席喫煙所らしいけど、タバコを吸わない俺には関係なし。

「あ…そういえば」

俺はロッカーに戻り携帯を取り出すと、発信履歴の一番上にある『玲花』に合わせて決定ボタンを押す。
数コールの後、聞きなれたの声の返事。

『もしもし喬生？どうしたの？』

「あー、もう炊飯器買った？」

『うん。今帰るところ。』

「そっか。運べそう？」

『うん。え、何？運んでくれるの？』

「いや…今バイトなんだ。休憩中だけど。」

『バイト？早いな、もう決めたんだ。』

「ああ、まあね。高校のときは短期しかやったこと無かったし。」

『でもバイトならどっちみち来れないじゃん。』

「悪い。週末買いに行くって言ってたの、さっき思い出して。」

『ふーん。今日ご飯は？』

「バイト終わるのが六時だから、適当に食べて帰るつもり。」

ちょっと沈黙。玲花の「んー」がいつもより長く感じる。

『ねえ、今日も一緒に食べない？炊飯器買った記念に、私のご飯炊くから。』

「俺おかず作れないぞ。」

『私が作るから大丈夫だよ。いい？』

「気前いいな。もちろん、終わったら連絡するよ。」

『はい。じゃあがんばってね』

妙にご機嫌の玲花の声。ほうほう、新しい炊飯器がそんなに嬉しいか。昨日まで出費がどうたら文句言ってたくせに。

でもメシを作ってくれるとはありがたいな…ヤツが毎日ご機嫌ならいいんだけど。

第三話

「もうカリキュラム組んだ？受講表の提出期限そろそろだけど」

「まだ。玲花は？」

大学へ向かう電車の中。今日は俺も玲花も一限から講義に出るので、同じ電車の吊革につかまって大学に向かってる。朝はいつも混んでいるので二人とも立つことになるけど、酷い混雑じゃないのが救いか。

隣に立つ玲花の格好は黒のストレッチジーンズにくしゃくしゃした？白シャツ、モスグリーンのジャケット。左手には革のトートバッグ。正直ユニクロやコムサで買ったものだけでもそれなりに見えるのは羨ましい限り。

「私もちよつと考え中。ほとんどは決めただけだね」

「サークルの先輩にでも聞いてみようかな」

「え！もうサークル決めたの？」

「入学式の後には勧誘されて試しに見に行ったら、同じ見学者と気が合っちゃってさ。結局そこに決めた」

「そっか…」

「玲花は？入学式の後本がつくれそうなくらいチラシ持って帰ってきてたけど」

入学式の日の帰り道で玲花とばったり会ったときの、大学の紙袋一杯に入ったサークルの勧誘チラシ量を思い出す。取り合えず渡された分は全て貰ってきたんだろうけど、かなりの量だった。

もうあれから一週間か。

既に大学は始まっているけど、今はまだカリキュラムを決めるために設けられた仮講義期間中。この一週間で好きな講義に出て自分の受けたい講義を決め、受講表に書いて提出しなければいけない。

「何かピンと来るところが無くてさ」

「じゃあやっぱり陸上か？」

「本格的にやるつもりはない、かな。喬生のサークルはどんなところ？」

玲花が質問するのとはほぼ同時に急行の停車するターミナル駅に止まる。車内アナウンスと共にどっと人が流れるが、残念ながら前に座る人たちは動かない。

どうせあと二つで大学のある駅だけだ。

「ウチは…飲みサークルかな」

「ふーん」

「何だ飲みサークルかよ、って反応だな」

「そんなことないよ。私はどうしよっかな…」

「何読んでるの？」

さっきまでテレビを見ていた玲花がいつの間にか目の前に立って、不思議そうにこっちを見ている。

今日はウチで夕飯を食べた後、玲花が俺の部屋に居座ってずっと特番のドラマを見ていた。夕飯を食べているときからやっていたので、戻るのが面倒とのことだ。

そしてテレビを占領された俺は、友達から借りた滅多に読まない小説を読んでいた。

「東野圭吾の、『どちらかが彼女を殺した』」

「ふーん、小説なんて読むんだ。」

「教科書除いたらほとんど初めてだよ。これも借り物。」

そう。今まで殆ど小説を読んだことが無かったけど、電車や暇な時間を潰すために友達のイケメン入来君に薦められて（次の日わざわざ持ってきてくれたので）借りることにした。彼はイケメンな上に文学青年で大人っぽい。そしてサークル内で既にモテている。って、それは関係ないか。

「おもしろい？」

「うん。意外にも読み出したら止まらない」

「へー、今度私も読んでみようかな」

俺は後ろにある自分のバッグから、友達から借りたもう一冊の文庫本を取り出す。

「別のだけど一冊あるよ。映画になったヤツの原作だけど、読む？」

「読む！」

ひったくるように文庫本を取ると、一番後ろのページあたりをペラペラと捲りだす。

え…最後から読むの？

「最後から読むの？」

「そんな訳ないでしょ。巻末の解説見たかったの」

ああ、そうですね。

しかし小説なんて慣れないものを読むと疲れるな。内容は面白いんだけど、活字をずっと連続で読むと頭に入りきらない感じがする。

キリのいいところで終わらせておこう。でないと寝てしまいそうだ。

第四話

部活が終わり、俺は部室棟の前で玲花を待っていた。

ウチの高校はシャワー室があり、10月末の今ぐらいまでは部活を終えて帰る時に大抵シャワーを浴びて帰っている。俺達下っ端一年生は大体最後に入ることになるけれど。

帰り道が同じ俺と玲花は、遅くなると分かっている時以外は一緒に帰っている。はっきり決めた訳じゃないけど、何となくそうしてる。残念ながら、お互いに彼氏彼女がいるわけでもないし。

「お待たせ」

「あいよ。じゃあ行くか」

と普通に歩き出す玲花の頭…というか髪に目が行く。

髪…ボッサボサじゃないか？さすがにそれはない…よな。これはツッコむべきなのか？天然か？

そんな風に次の一言をどうするか考えていると、ふわっと吹いた風に乗ってお風呂の香りがした。

石鹸の香りだ。

「あー、やっぱり石鹸で洗ったのは失敗だったな」

思っていたことが口にでたのかと一瞬ドキリとしたが、こちらを見

ることなく髪を気にする玲花を見てホツとする。
って、普通体は石鹼で洗うんじゃないのか？

そう聞くと玲花は苦笑いのような顔で「ひひっ」と笑う。ちよっと子供っぽいけど、認めよう…かわいい。

普段から女らしさなんて欠片も感じないが、同性とも異性とも楽しくでき人から好かれるタイプだと思う。

「頭だよ。シャンプー切らしちゃったから髪を石鹼で洗っただけど、ボサボサ」

理由を聞いてアホか…と思いつつ、それで石鹼の香りがしたのかと納得。

くせつ毛が嫌でベリーショートにした（と本人が言っていた）くせに、そんなにボサボサじゃ意味がないのでは？

ボサボサ頭を眺めた後に、ふと視線が下がり首筋が目に入る。こうして改めて見ると、結構色白だよな。

昔は俺と同じくらい日焼けして真っ黒だったのに。最近は日焼け止めとか使ってるのかな。そういえば最近胸も…。って、いかにいかん！

「？」

顔が熱いぞ、正気に戻れ俺！

いつものように二人で並んで自転車で帰る。
そしていつもの通り斜度が急な坂道を登るため、二人で歩いて自転
車をおす途中。

自分一人の時はこのくらいの坂道なら一気に上ってしまふ。二人の
時は歩いて上る。理由はまあ…パンツが見えてしまふからね、うん
向こうはいつもの通りだけど、こっちはちょっと…いや、かなり変
だ。

どうしても玲花を意識してしまう。頭の中でさっき見た首筋と胸元
が現れては消える。今更と言いたくなる位、もう何千回と見てるは
ずなのに。

考えても見れば、幼なじみというのもあるけど部活がある日はほぼ
毎日一緒に帰ってる。そしてお互い性格を知り尽くしているからか、
玲花と一緒にいるときが一番楽しい。

俺ってもしかして、玲花のこと好きなのか？

「なあ、俺たちいつも一緒にいるよな」

「そうだけど…それがどうかした？」

待て待て早まるな。そんな素振りは一ミリもないけど、玲花に誰か
好きなヤツがいる可能性もある。ウチと玲花の家は親同士仲が良い
から、最悪俺が振られた後に嫌でも顔を合わせることになる。それ
は気まずい。

告白とかはまた別にして、まず探りを入れるか。

「あー、いや。お前好きなヤツとかいないの？」

なるべく軽めに聞いたつもりだったが、玲花は俺の質問に思い切り不審そうな顔をして、そっぽを向いてから返事を返す。

「どうしたの。何か言われた？」

「いや、そうじゃない」

いないとは言わないのか。表情は…横顔だけじゃ分からないな。

ああ、聞き始めたら心臓がドキドキしてきた。

「じゃあ何」

再び視線をこっちに戻すと、ちょっと強めに聞いてくる。イライラしたときの口調だ。

仕方ないだろ…聞きにくいんだから。ちょっと質問の仕方を変えるか。

「俺達よく一緒に帰ってるだろ。まあ朝もだけど…そういうの、どう思う？」

すると玲花はちよつと怒った声で返す。

「はあ…！？だから言いたいことあるならはっきり言ってよ。もしかして、一緒に帰るのが嫌になった？」

「いや、そうじゃなくて」

違う違う、何でそうなる。

言いたいけど上手い言葉が見つからない。ああ、黙ってるの見てま
すます怒った顔になってる。
言っちゃうか、もう。

いやだめだ…心臓が痛い。ん？心臓はおかしいか。もうよく分から
なくなってきた。

でも勢いは大事だよな、ここで言わなきゃ後悔するかも…ああ！

「す、好きだ」

「え」

時間が止まったように、ピキッと表情が固まる玲花。
しかも俺かんだ。恥ずかしい！

「なんつーか、あれ。女として好きだ。お前のこと」

心の中では『あーあーあー、言っちゃった。もう終わりだ』と思い
ながら、ゆっくりとそう続ける。

固まっていた玲花が動きだすまで瞬きも忘れるくらいじっと見つめ
る。

数十分…と思えるくらいの時間。実際はほんの数秒なんだろうけど。

「なん、な…っ」

玲花は喋り出したかと思うと、顔を真っ赤にしてカバンをブンブン
と振り回す。

「いたっ、やめ…何すんだよ」

「そんな大事なこと、帰りがけにさらっと言っな!」

「ちよ、お前が言えって」

「そ、それは…だ…う…ああっ!」

「…ちよっといいか」

「え?ちよっど!?!」

俺は玲花の腕を引つ張ると、自転車を置いてすぐ近くにある公園に入る。

雑木林のような緑に囲まれたベンチへ行き、辺りに人がいないことを確認して腰を下ろす。

「あの、喬生?」

玲花の声。戸惑ったような声だけど、表情までは確認できない。

恥ずかしくて顔が見れない。

「さっきも言ったけど、好きだ。いつも一緒にいて楽しいし。その…付き合っって欲しい」

「…本気?」

「本気だよ」

「…」

少し続いた無言に耐え切れなくなり、玲花の方を見る。俺が見ていることに気付いたのか、玲花はチラリとこっちを見たあと、黙って頷いた。

やったああああ！

「オツケー、ってことか？」

「うん。よ、よろしくお願いします」

「やった！」

と…心の叫びが口から出てしまった。

「私でいいの？可愛くないし、そういうの求められても自信ないよ。知ってると思うけど、付き合ったりとか始めてだし」

そう言っつて顔を真っ赤にして下を向く。
かわいいです、はい。

「いいよ。顔真っ赤、かわいい」

「う、うるさい。さっき告白かんだくせに」

「よ、余計なことを」

「しゅ、好きです！…って」

「似てねえ！くっそー、バカにしゃがって！」

「喬生、寝るならベッドで寝なよ」

「ん…？」

体を揺すられて起きると、目の前にはミディアムショートにゆるやかウエーブの玲花。

「本、テーブルの上に置いといたから」

「あれ、寝ちまったのか…くあ」

伸びをして時計を見ると、11時ちよい過ぎ。

小説を読んでたはずなのに、いつから寝てたんだ？そういえばトリツクの花札の解説を読んでたあたりで眠くなったような気も…。

「私部屋に帰るからね」

「うい」

その場で寝転んだまま、逆さまになった玲花を見送る。玲花はそんな俺を溜め息まじり一瞥して、部屋を出て行った。

何か夢を見た気がする。でも玲花に起こされて、まるっと忘れてし

まった。

テーブルに置いてある、さっきまで玲花が読んでいた小説に目をやると、

『栞の位置変えたら天罰が下る』とメモ書きが添えてある。

まあ恐ろしい。ちょっとだけページをずらしてやろうか。

そう考え出すと、このメモ書き自体がダチヨウ倶楽部的な意味に見えるから不思議！やらないけどね。

第五話

「くあ……」

布団から起き上がり、伸びをする。昨日は早い時間から布団に入っただので、目覚めは最高。

…でも時計を見るともう昼。
だめだ、こりゃ寝すぎだ。

「さあて、部屋片付けないと」

今日は夕方から大学の友達と宅飲みすることになっている。普段から玲花がよく出入りしているから汚くしているつもりはないし、見られてマズいものはしっかり管理してる。まあ女も来るし念のため。

部屋は一ヶ月ちょっと前の引っ越してきた日と比べてかなり片付いてきた。

親からの「最低限の必要なもの以外は後から買い足していけばいい」というアドバイスに従ったら、『無いものは諦める』になり、結果的にモノが少なくて済んでいる。自分はモノを捨てられない人間だと思うのでこれくらいが丁度いいのかも知れない。

まあ、今必要だ！という時に玲花に借りれる甘えもあるけど。

「綺麗にしてるなー。俺の部屋とは大違いだ」

「そついうの、性格が出るよね」

「おじゃましまーす」

今日来たのは同じサークルの友達三人。イケメンの入来君と、同じ学部のせいさかサークルで一番仲が良い柴田幸治。唯一の女性が吉田さん。

ちなみに部屋に入って第一声を上げたのが幸治。次が吉田さん。礼儀正しいのが入来君。

ウチのサークルは一年だけでも二桁人数がいるけど、最初から雰囲気合うというか、会話が弾んだのがこのメンバー。昼休みなんかも一緒にいることが多い。

「私も人のことは言えないけど。入来君は実家だっけ」

「うん」

皆口々に俺の部屋の感想を言いながら飲み込みの準備をする。

ただ準備と言ってもアルコールとおつまみを配置するだけ。当然まだ日も明るいうちからじゃんじゃん飲みだす訳で。

「川元君の部屋ってさ、女の気配があるよね」

「ぶっ」

梅酒片手に、ニヤリとする吉田さん。

…突然何を。

「おお、女のカンか」

吉田さんの言葉に幸治が乗る。

「まあね。彼女さん結構マメに来るでしょ」

「彼女なんていないよ……」

「ウソだ」

「いやいや、いないっす」

吉田さんからのキラーパスを切り抜け、話は大学から時代を遡りそれぞれ的高校時代の話になり、今度は先輩その他から仕入れた大学の講義の話になっていた。

いつもならそろそろメシの支度する頃だな…なんて思った時、玄関から『がちゃり』という音がかすかに聞こえた。

「あれ」

そして今度は玲花の声が聞こえる。

皆が一斉に反応するより先に、俺は一人玄関へ急行。

「おお、どうした」

玄関にはちよつと戸惑った表情の玲花。

「ごめん、友達来てた？ご飯どうするのかと思って…さっき携帯にかけたんだけど繋がらなかったから」

「あー、悪いな。今日友達と飲んでって、うわ」

「彼女!？」

と、いつの間にか現れた吉田さん。ちょっと、そんな顔近づけないでくれ…酒臭いよ。梅酒何杯飲んだんだ。

「違う違う」

俺の反応が面白いのか、吉田さんがニヤリと笑う。まあ絶対言っだろうと思ったけどね、この人。

「隣に住んでる真木です。お邪魔してすみません」

玲花がバカがつくほど丁寧に挨拶する。

「お邪魔なんて。お隣さん、ねえ？」

「なあ。その割にはやけに親しげだよな」

吉田さんの言葉に嬉しそうに乗る幸治。

二人とも酒が入っているのか、妙にやらしい言い方だし。唯一同情的な目で見てくれる入来君だけが救いだよ。ってか、笑われてる？

「中学からの同級生…家が近所だったんだよ」

幼なじみねえ、と呟くように言う幸治。ニヤニヤするんじゃない。

「真木さんも一緒にどうですか？人数多い方が楽しいし、女私一人しかないから寂しいから」

「え？」

吉田さんにそう言われ、玲花は「いいの？」という表情を俺に向けてる。というか、その口が動いた。

さては吉田さん…俺との話を聞いて酒のツマミにするつもりだな。何が寂しいだ。一番楽しんでるのはどこのどいつだよ。

「飲みましようよ。川元君との話が聞きたい！」

早くも本音が出たな、この悪魔！

結局玲花も交えて五人で再び乾杯。すぐに玲花と吉田さんはちょっと離れたところで女二人で盛り上がっている。

まあ楽しそうで何よりなんだけど、不安になるのは何故？

あれだ。吉田さんって、何となくだけど高校の時に玲花と仲の悪かった女子とかぶるんだ。だから玲花とは気が合わなさそうに見える。高三の時に、さばさばした性格の玲花達と、いかにもな仲良し女子グループを率いるその子とでクラスの女子が割れてたっけ。

それ見て最初は何で仲良くできないのか不思議だったな。でもその女子グループがキャツキヤと仲良く話してた時、何かの用事で一人抜けた後にその子の悪口を全員で言ってた時は流石にドン引きした。それで俺は女子の『仲良し』を信じられなくなったからな。

「幼なじみ、ねえ」

俺の肩に肘を寄せ、さっきと同じ台詞を吐く幸治。

「悪いかよ」

「いや。別に」

「もうこの話はいい。さっきの続き、授業のこと」

「はぐらかされた！」

「あはは。でもそう、さっき話にのぼった般教の国際経済論」

わざと大げさなりアクションをとる幸治を笑いながら、入来君が違う話題を振ってくれる。

「そうだそうだ、入来君あの講義とったの？」

救いの神！とばかりに入来君の話にくらいつく。まあ、さっき話の途中になってたから気になってたのはホント。

話に出た般教とは一般教養の講義のこと。

学部学科ごとの必修科目と違って広く他の学部の人履修できる。別の学部の人とも話が通じ、かつ必修科目と比べると単位が取りやすかったりするの、サークル内でもよく話題になる。

ちなみに俺と幸治は同じ経済学部で入来君は国文。吉田さんは…確か商学科だったかな。

「先輩に聞いたら、単位ももらえるの二割くらいしかないみたい。失敗したよ」

溜め息まじりの入来君。

「あ、俺もこの間聞いた。講義取った先輩みんな不可だったってさ。野本先輩ですら不可だったらしいぞ」
裂きイカをかじりながら幸治が言う。

あんな真面目な野本先輩が…。絶対にとらないぞ。

その後もあの講義は失敗した、とか出席すれば取りあえず単位をもらえると、という噂の講義について話が及ぶ。

「そろそろ帰ろうかな。終電も近いし」

「そっか…んじゃ、俺も帰ろうかな」

入来君が帰り仕度を始めると、ちよつとフラつきながら幸治もそれに続く。

入来君は酒に強いのか顔に出ないのか、飲み始めてから顔色が全く変わらなかった。本人は「酔ってるよ」とにこやかに言うけども。対する幸治は全体的に赤い。顔だけじゃなくて腕も赤い。ただ「泊まる」とか言い出すんじゃないかと思ってたので、帰ると言ってくれて一安心だ。入来君がついてくれば無事帰れるだろうし。

ちなみに俺はさつき頬が真っ赤だと全員に笑われたので、多分赤い。特に吉田さんが赤ちゃんみたいと大爆笑していた。まあ、その吉田さんは誰よりも赤いゆでだこ状態なんだけど。

「あれ、もう帰るの」

入来君が帰る準備をしているのに気付いた吉田さんが、ゆでだこ顔で口をとがらせる。

「もうって、もう11時近くだよ。電車無くなったら帰れなくなるよ」

入来君にそう言われ、吉田さんはニヤリと嬉しそうな顔をする。

「私は今日真木ちゃん家に泊めてもらおう」

そう言っつて玲花に抱きつく。玲花は抱きつかれてよろめいたが、表情はニコニコしたまま嬉しそうにしている。

「まじで!?!」

俺は思わず声が裏返ってしまった。

俺の不安をよそに、もの凄い仲良くなつてませんか? まあ、いいことだけども。

「別に真木ちゃん取ったりしないから、安心しないでいいよ」

と、吉田さん。

玲花は相変わらずニコニコ。一緒に酒飲んだことなんて無いから知らなかったけど、もしかして笑い上戸? というか笑顔上戸?

俺の心配は杞憂でしたか。そうですか。

第六話

宅飲みの日。

俺はマンションにある玲花の家の前にいた。夕方までのバイトから上がり、時刻は夕方の6時50分を回ったところ。

日曜日なのでいつもよりピークの混雑が酷かったけれども、無事時間通り帰ることができた。日曜だというのにバイトしかすることの無い俺バンザイ。

今日は玲花のところで晩飯を食べる予定だ。最近お互い自炊するには食べてくれる人がいれば頑張れるという結論に達し、予定が合う日はどちらかが作り一緒に食べようということになった。

それで今日は俺が七時頃にバイトが終わるので、それに合わせて玲花が晩飯を作るという話をしていた。ところが、さっきバイト先を出る前に携帯へ電話したけども返事なし。

それでハラペコの俺は仕方なく直接部屋へ行き、チャイムを鳴らしたという訳だ。

「おかしいな」

出てくる気配が無く、急用で出かけたんだろうかと思ったその時。がちやり、とカギを開ける音がしてドアが開く。

「いめん…」

中から出てきた玲花はバツの悪そうな顔をして開口一番に謝る。

「いや、いいよ。寝てた？」

「うん…電話もらった時に起きた」

玲花にしては珍しく、寝巻きの高校ジャージのままだ。髪も寝癖が隠し切れていない。

だらしない生活が嫌いだと言う玲花は、家から出ない日でもほぼ必ず着替えている。その玲花が夕方過ぎても寝巻きとは…もしかして二日酔いで寝てたかな。

「二日酔い？」

「違う。あ、上がって」

「うい」

いつもの見慣れた部屋だけど、心なしか散らかってるような。さては昨日の吉田さん来襲で部屋を荒らされたか。

あまりジロジロ見る気は無いけど何となく……あ。

ベッドの脚元に転がった、女の子っぽくない玲花の部屋には不似合いなヌイグルミを手取る。

「これ…」

それは30センチくらいある、ちょっと大き目のライオンのヌイグルミ。可愛くデフォルメされた造形はたてがみが無ければネコに見えない。こいつは見覚えがある、間違いない。

「わー！」

玲花は驚きの声をあげて俺からひったくるようにヌイグルミを奪つと、ベッドの下にある引き出しに仕舞う。

「持ってきてたのか」

「…一応」

「そっか」

そのヌイグルミは俺が高校一年の時に玲花への誕生日プレゼントとして贈ったものだ。その頃はお互いアクセサリーやらには興味も無くて、結局地元雑貨店で玲花が気に入ったそのヌイグルミを買うことにした。当時から玲花と女の子らしい可愛いものが結びつかなかった俺は、かなり意外だった記憶がある。そして本気で怒られる程からかい倒した。

そう言えば玲花の実家を見たことも無かったし（と言っても玲花の部屋に上がる機会はあるにないけど）、勿論こっちに来てからも見ていなかったのですっかり忘れていた。まだ持ってたんだな。

「ヌイグルミの話は置いといて」

「ん？」

「実はさっき起きたばかりだから、ご飯作ってないんだ」

「ああ…そっか。こんな時間まで寝るなんて珍しいな」

「昨日二人で話してたら、結局朝になっちゃって」

「うえ、よくやるよ。それでさっきまで寝てた訳か」

よく朝までなんて話ができるもんだ。でも納得。とは言え今からメシ作っても仕方ないよな。

「何か買ってこようか」

「お願い」

玲花は両手を合わせてお願いします、のポーズをする。

でも表情は申し訳ない…というよりは、ラッキー！って気持ちがいじみ出てるような。

「食欲は？二日酔いでは無いんだっけか」

「うん。ハラペコです」

「あいよ。適当に弁当買ってくる」

近くにある弁当屋で食糧を調達し、早速晩飯にすることにした。

俺が弁当屋に行っている間に着替えたらしく、戻ったら玲花は寝巻き姿からスウェット＋パーカーになっていた。正直そんなに変わらないと思うけど。

ちなみに俺がカツ丼とカツカレーを買って帰ったら、チヨイスが気に入らなかつたようで文句を言われた。さっきまで寝てたくせに。カツの何が気に入らないのか、全く。

しかも文句言った割りにカツ丼を美味そうに食べてるし。

「そうそう、サークル決めたよ」

静かにテレビを見ながら食べていたところで、玲花が話を振ってきた。

「おお。何にした？」

「弓道サークル。見学も行って来たんだ」

「弓道？」

これはまた意外な。もっと運動系ならもっとアクティブなものにす
ると思ってた。

でも…袴姿はいいかも。高校に弓道部はなかったので、ぼんやりと
したイメージだけだけど。

「喬生も行ってみる？」

「いや、俺もうサークル入ってるから」

「結構かけもちしてる人も多いみたいだよ」

「そっか…って、行かないけどな。でも何でまた弓道？」

「見学行ったら楽しそうだったから。それに教えてくれる人がちゃん
といるしね」

「へえ、じゃあ弓とか袴も買うのか。よく分からないけど、結構するんじゃないか？」

「最初は貸してくれるらだつて。負担にならないように順番に揃えればいいから、つて」

その後一通り見学した感想やら何やらを披露された。

道場は貸しきりじゃないからお爺ちゃんも一緒にやっていたとか、メガネ率が高いこと。あと手に着けるカケとか言う道具は鹿皮だとか、意外なことにアーチェリーみたいな点数制じゃなかった…などなど。

二人とも晩飯を平らげ、サークル話も一段落したところで、話は昨日の飲み会に戻っていた。

俺はベッドに腰掛け、玲花はフローリングの上に置いたクッションに座り、ベッドにもたれている。テレビを見ながらなので顔は見えない。

「そう言えば。一晩中話してたつて、どんなこと話したんだ？」

「うーん…大学のこととか、高校の時の話とかかな。でも実はあんまり覚えてない」

「ひでえ」

「仕方ないじゃない。酔ってたし」

「でも吉田さんと二人で話してくれてて助かったよ」

テレビの方を向いたままだった玲花が顔をこっちに向ける。

「え？」

「だって俺たちの事からかう気満々だっただろ。昔付き合ってたこととか知ったら直ぐに広まるぞ」

「あー…そういう意味ではからかわれたかな」

少し声のトーンが下がり、表情も少し不機嫌に。そしてまた顔をテレビの方へ向ける。

ああ、いつもそつだ。昔付き合っていた頃の話をするとな機嫌が悪くなる。

「だ…だろ」

「何で一緒のマンションにしたのとか、色々。…でも、私たち幼馴染だしね」

「ん？ああ」

そしてこれもいつものパターン。付き合う云々という話で機嫌が悪くなると、最後は「幼馴染だし」というところで落ち着く。

家族や友達からは玲花の機嫌が悪いと大抵俺のせいになされてしまうので、いつもこれで丸くおさめている。

「悪くないよね」

「そつだな…便利だし」

「何よそれ」

第七話

「聞いちゃった」

背後から現れた吉田さんはとてもイヤな笑顔を浮かべながら挨拶？をしてきた。

ここは中庭のサークルスペースで、一応公認サークルには決まった場所が割り当てられて自由に使える。と言っても、備え付けのベンチとテーブルしかないので、昼飯や休憩、それに新入生の勧誘（俺もここでサークルの説明を受けた）くらいにしか使えない。

そして部室棟からあぶれた一年生が使っている。四限まで終わると部室にも人が増え、バイトまでの時間を潰そうとする俺みたいな一年は必然的にこっちへ来ることになる。

吉田さんはテーブルを挟んで向かいに座ると、バッグからポーチを取り出す。

よく見れば今日はやけにおしゃれに気合が入っているような。短めのスカートや玲花は絶対に着ることの無い胸の強調されたものもよく着ているけど、それに加えて今日は目元や唇がキラキラしてる。

「何が？と言うか、合コンですか」

「まあね。誘われたから、ものは試しに」

試して…その割には鏡でメイク確認したりと気合入ってるんじゃない。あ、香水シュッシュッしてるし。

「で、何を聞いたって?」

化粧ポーチに手鏡や黒色の小さい香水瓶をしまいながら、再びイヤな笑顔。

風に乗って吉田さんが付けた香水の甘い香りがする。

「付き合ってたんだって? 真木ちゃんと」

オーウシット!

一番喋っちゃいけない相手に喋ってますよ玲花さん。俺がこの話をする和不機嫌になるくせに!

「…まあ」

「怪しいとは思ってたけど」

これは面倒くさいことになった。スルーで切り抜けるか。

「はいはい」

「詳しいことは教えてくれなかったけど、何で別れちゃったの?」

「…そういうの普通いきなり聞く?」

「むしろ普通気になるよ。どう考えても元彼氏彼女の雰囲気じゃないでしょ」

「幼馴染だから…かな?」

「何で疑問系。そういうもの?」

つまらなさそうな顔をする吉田さん。何を期待してたんだ。でも玲花がよく使う『幼馴染だから』って、結構便利なのかも知れない。高校のときは周りも俺達が幼馴染ってことや家が近いことも知ってたから、特に説明する必要も無くて分からなかったけど。

「そういうものってことで、この話は置いて。そんなことよりも俺は意外だったよ」

「何が？」

「玲花とあんまり相性良くないかなと思ったから。もの凄い勢いで仲良くなってビックリした」

「何でそう思ったの？ああ、私がいじわるしそうとか？」

そう言って、わざとらしく口角を上げて笑顔をつくる。

とりあえず話を逸らすことに成功。

「いやいや、クラスで玲花と仲良くなかった子と雰囲気が似てたから」

「私？」

「雰囲気ね。性格とかは全然分らないから」

「私は真木ちゃんみたいな良い子となら幾らでも仲良くできるけど。という訳でほら、何でそんな良い子と別れたのか言いなさい」

そう言ってビシッ！と俺のことを指差す。

…また話を戻された。

「どういう訳で、だよ」

「あー、あんな良い子の初めてがこの男に！」

「は!?!」

「え?」

俺が驚いたことが予想外だったのか、困惑の表情を浮かべる。そしてそのままお見合い状態になって固まってしまう。数秒して吉田さんが視線を左右に泳がせた後、あははと笑う。

「シモ系はNG?」

顔は笑ってるけど、ちょっと気まずそうな言い方。

そういう訳ではないけど…。というか玲花がどう話したか分からないけど、絶対聞いた話を拡大解釈してるよ。彼女が噂話を周りにして、その話が伝言ゲーム状態になる様子が目に浮かぶ。

「いや…別に。えーと、言いたいことは色々あるけど、そういうこと振るか普通」

「相手は選ぶよ」

なんじゃそりゃー!

と心の中で叫びながら、顔は平静を装う。冷静に冷静に、むきになるだけからかわれるぞ。

「…そういうのは飲み会でしてくれ」

「飲み会ならいいのね。分かった」

「そうじゃないッ！」

「あはは。じゃあ私は行くけど」

そう言って吉田さんは鞆を肩にかけて立ち上がる。
ようやく解放される…。

「俺はバイトまで時間潰して行くから」

「そっか。バイバイ」

笑顔になって胸元で小さく手を振る吉田さん。ほっほっ、何も知らない人はこれに騙されるわけだな。

「うい。合コンがんばって」

「川元君もがんばってねー」

…何をですか？

第八話

ピンポン。

家のインターホンが鳴る。時刻は夜の十時過ぎ、こんな時間に一体誰だろう。ちょっと早いけれど明日の限からの講義のため、こっちはもう寝る気満々だというのに。

ドアの覗き穴から見ると女性の後姿が見える。…もしかして玲花か？
ドアを開けると、そこにいたのは予想通り玲花だった。玲花はドアを開けた俺を押しつけるようにして、ずんずんと玄関へ入ってくる。何か様子がおかしい…って、酒くさ！

酔っ払いらしく陽気に「ただいまー」と言う玲花。しかもそれを俺の方ではなく、部屋の方に向かって言っている。

「…お帰り、ってここ俺の家だけど」

「はい、お土産」

「おお。何だかよく分からないけどサンキュー」

玲花がずい、と差し出した紙袋を受け取る。その間とにかくニコニコしている玲花。

そうだ、今日はサークルの新歓コンパがあるって言ってたな。大分飲んだんだろう、顔がほんのり赤い。この酔っ払いめ。

前もそうだったけど、飲むところなるんだな。楽しそうにしている

分には怒ったり泣いたりするような面倒臭いヤツよりはずっといいか。

「はー」

玲花は深い溜め息を一つつくど、何のためらいも無くブーツを脱ぎ捨てる。そして先に玄関から部屋へ戻った俺の横をすり抜け、吸い込まれるようにベッドへダイブする。もちろんそれは俺のベッド。

「おいおい、自分とこで寝ろよ」

うーん、と返事？をして上半身を起こす。そして一言、

「水」

はいはい、もう何も言わないよ。

玲花に水を渡した後、さつき受け取った紙袋を見るとサンマルクカフェと書いてある。玲花がお気に入りのチヨコクロワッサン売っているカフェだ。開けてみると中身は予想通りチヨコクロワッサン…でも数は三つ。

何故チヨコクロ？そして何故三つ？

理由を聞こうと振り返ると、ってちよつと！

「布団にもぐるな！ちよつと、玲花さーん？」

俺の呼びかけに反応して、ムスツとした顔を布団から出す。

「うるさい。もう寝る」

「なら自分の部屋に帰れ。そこは俺が寝るところだ」

俺の言葉を聞いてか分からないが、玲花はもぞもぞと動き奥にずれてスペースをつくる。

「おやすみ」

「ちょっと、そうじゃなくて」

仕方なく掛け布団を引っぺがして起こそうとするも、玲花に腕を掴まれる。そしてそのまま引っ張られて俺はうつ伏せの状態でベッドへ突っ込んでしまった。

玲花は俺のことなどお構い無しに、掛け布団を元に戻す。

「何すんだよ」

反応なし。

はは。もういいや、好きにして。ベッドのレンタル料は後で何かの形で支払わせてやる。

諦めてベッドから出ようと体をひねり、玲花に背中を向ける形になる。

「お…」

ベッドから出ようとしますが、玲花に背中を向けた体勢から体が動かない。

気付くと腹に手を回されて、後ろから抱き付かれている。

これは…背中に…柔らかい…。

「……………」

普段はベッドに入れば全く眠くなくても直ぐに寝れるくらい寝付きが良いのに、この日だけは一時間かけても全く眠くならなかった。

結局眠くなったのは、頭の中で入来君が人生のサクセスストーリーを歩む入来ストーリーを考え出したあたりから。社員30名くらいのベンチャー企業社長になったあたりで意識が飛んだ。ありがとう入来君。

ゴツン！という衝撃音が頭に響き目が覚めた。

「う…」

体にはひんやりとしたフローリングの感触があり、そのフローリングに触れている右半身が痛い。そして正面に見えるはベッドの脚。…ベッドから落ちたのか？

体をさすりながら起き上がる。外はもう明るいんだらう、カーテンの隙間から光がさしている。

ふと気づけば、ベッドの上から俺を見下ろす玲花。

そうか。昨日は玲花が強引に俺のベッドで寝て、巻き込まれる形で俺も寝たんだ。

「何で私、喬生の部屋で寝てるの…」

寝惚けてるのか昨日の記憶がないのか、驚いた顔の玲花。俺は溜め息を一つつく。

「昨日酔っ払って俺の部屋に来て、勝手に寝たんだろっつが。あー、さっき俺のこと突き落とすな」

「だって、びっくりしたから」

「…ちなみにお前が勝手に俺のベッドで寝て、起こそうとした俺を引きずり込んだんだぞ」

「ウソ!？」

「記憶に無い方がお前のためだと思っ」

「…忘れて」

恥ずかしそうに髪をくしゃくしゃ、とする。そして溜め息をついてベッドから降りる。

溜め息をつきたいのは俺なんだけど。

「喬生、今日一限じゃなかったっけ？」

「ああ、そっだよ。とっくと準備して…」

玲花が無言でベッドの脇にある目覚まし時計を指差す。

八時五十五分。

講義の開始時間は九時。そしてウチから大学までは上手く行っても三十分はかかる。準備を入れれば約一時間。着いてもすぐ講義終了だな…。

「遅刻…」

うな垂れていると、枕元にある携帯が鳴る。メールだ。送信元は幸治から。

『どこに座ってる？教場変更あった？』

一限の講義は学部が同じ幸治と一緒に受けている。多分俺の姿が見当たらなくてメールを送ってきたんだろう。

いま起きて家にいる、とメールを送ると、幸治からは件名ナシで『笑』とだけ返ってきた。

「く…」

続いてもう一通幸治からメールが。

『出席カードを書いておくので学籍番号を教えてください』

お前を誤解してた、友よ！

幸治に感謝しながら素早くメールを送信。

と、また直ぐに返信が。

『代わりに今日の昼はお前のオ・ゴ・リ』

最後に絵文字のハートマーク付きだった。これほど絵文字のハートマークが憎くらしく見えたのは生まれて初めてだ。

「幸治に出席頼んだから大丈夫。二限から出るよ」

「…何のための大学なんだか」

くそぞう。

正論だけど、ちょっとはお前にも責任はあるんだぞ。

「朝食食べるでしょ。パンでもいいなら準備するよ?」

「…食べる。どういう風の吹き回しで?」

「一応、昨日迷惑かけたみたいだから」

食べ物に釣られた訳では決していない!決していないが、その真摯な態度に免じて昨日の暴拳は許そう。

その後は玲花の用意したトーストとスクランブルエッグを食べた後、昨日の『お土産』チョコクロも食した。

何故チョコクロを買ってきたのか、そして何故三つだけなのかは本人も分からないとのこと。ただ財布に入ってたレシートを確認したら『チョコクロワッサン六個』と書いてあったそう。

それってどんなミステリー?

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339f/>

アンコンディショナル

2010年10月10日22時07分発行